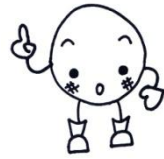


多くの若者が住み続ける島

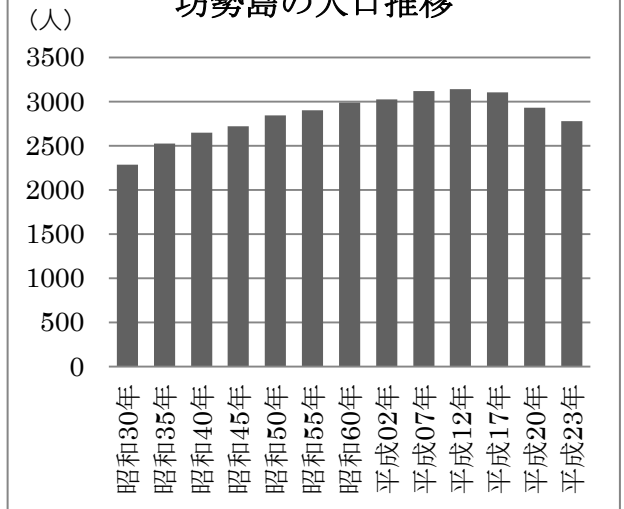
兵庫県・坊勢島ぼうぜじま（家島諸島）

「瀬戸内海で唯一、人口が増加している島」と呼ばれていた島があります。兵庫県姫路市家島町坊勢島（ぼうぜじま）。家島諸島に4つある有人島の一つです。島の名前は、平安時代に比叡山の高僧がこの島に流され、弟子が大勢移り住んだことが由来とされています。

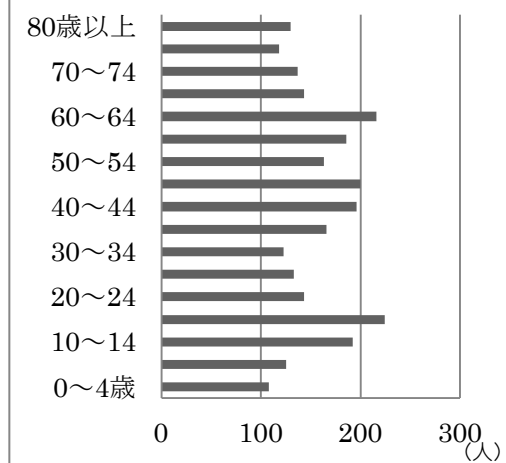


坊勢島は、周囲約12キロと、祝島とほぼ同じくらいの小さい島ですが、人口は昨年の6月現在で2782人。最近では若干減少しているようですが、10年前までは年間におよそ20人ずつ増加していたようです。そして、驚くべきことは、30歳未満の若年層が人口のおよそ45%を占めていることです。逆に高齢化率（65歳以上が人口に占める割合）はおよそ18%で、これは全国平均より低い値です。過疎と高齢化に悩む他の離島とは違って、若者が多く活気にあふれています。

坊勢島の人口推移



坊勢島の年齢別人口



◎元気な漁業が若者を呼び戻す

島の基幹産業は漁業。その漁業が元気なことが、島に若者を定着させる原動力になっています。多くの若者が、高校を出たら島で漁師になる、といいます。坊勢漁協の組合員の平均年齢は45歳、全国でもトップクラスの若さです。いかに多くの若者が漁師という職業についているかが伺えます。

坊勢漁協の漁獲高は兵庫県で1位。組合員1人あたりの年収は平均で約一千万円だそうです。播磨灘の豊かな漁場と、大消

費地である京阪神地区に近いという恵まれた環境に支えられて安定した収入が得られることで、若者が安心して漁師の道を選びこころができるのが大きな理由です。

◎島独特の風習が若者をサポート

しかし、それだけが若者を島に定住させる原因ではなさそうです。なぜなら、同じ播磨灘周辺の多くの漁業関係者は高齢化と後継者不足に悩んでいるからです。なぜ坊勢島の若者の多くが島で漁師をすることを選ぶのでしょうか？ それには、この島独特の風習も影響しているようです。

そのひとつは、「兄弟分」といわれる風習。「兄弟分」とは、小学校を卒業する頃までにできる同年代の気の合った仲間のグループのことです。親兄弟と同じように強い絆で結ばれた「兄弟分」は、一生を通じて日常生活から祝い事、弔い事まで、あらゆる面で協力し合います。

また、「新宅分け」という風習も、若者にとってはありがたい風習です。島では、息子の結婚が決まると、親は借金をしてでも、近くに家を建ててやって嫁を迎えるといいます。

島の女性もふるさと志向が強くなり、一旦は阪神地区に就職しても、適齢期になると島に戻り、島の男性と結婚する割合が高いとのこと。経済的な心配なしに子どもが産め、住み慣れた場所で安心して子育てに専念できることが大きな理由のようです。

若者が漁業によって島に定着して、結婚し、子どもを育てる。そして、その子どもたちが成長して基幹産業の漁業を支える。このサイクルがしっかりと維持されていることで、いつまでも若者が住み続けられる坊勢島を実現しています。

◎観光漁業の取り組み

上関町でも参考に成りそうな取り組みもされています。ですので、紹介しておきます。

坊勢島では、通常の漁業以外にも、観光漁業にも取り組んでいます。具体的には、「海の釣り堀」です。

海上を網で仕切りたいけすに、マダイやカシロ、シマアジなどを放し、ここでお客様に釣りをしてもらおうというものです。高級魚を釣り上げる醍醐味と、釣り堀の手軽さを同時に味わえるという好評を博しています。

姫路港まで船の送迎付きで半日遊んで一万三千元。週末には1日三百人が押しかけるほどの人気だそうです。釣りに来たお客様によって地元宿泊施設の利用率もアップするという波及効果も出ています。

◎地域に若者が増える条件とは

坊勢島の例を参考に、地元で若者が住み続ける条件を考えてみましょう。

- ・安定した収入（仕事）があること
- ・住宅が確保できていること
- ・結婚相手が確保できること

互いに助け合い、協力し合える、住み心地のいい地域社会であること

こういったことがあげられると思います。もちろん、これ以外にも、医療や学校などが整備されていることや、買い物など、ある程度の利便性も必要なことだと思います。

これらの条件をひとつひとつ満たしていくように、町役場や企業や店舗、漁協・農協、そして町民が協力し、知恵を出し合っていて、楽しいまちづくりをしていきたいものです。

